

長野環境人土

自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん対談企画

動物言語学者
鈴木俊貴さんと語る

シジュウカラに言語能力があることを証明し、「動物言語学」という新たな学問分野を切り開いた鈴木俊貴さん(41)は東京大学准教授。は軽井沢の森に通うようになり、今年で20年目。シジュウカラの鳴き声のレパートリーの多さに関心を持ち、長年研究を続けている。

タカやヘビなど共通の敵から逃れるため、言語能力を発達させ、危険を素早く察知し、互いに警戒情報を共有するシジュウカラ。それだけでなく、餌の在りかも知らせ合い、ヒガラやコガラなどほかの種類の鳥たちもその情報ネットワークに加わっている。小動物のリスに対し、天敵がいるという嘘を知らせ、えさを置いて逃げていった隙に横取りする狡猾さも併せ持つ。そんな小鳥たちの賢さに「賢すぎて怖くなる」と鈴木さんは目を輝かせる。

古代ギリシャの時代から人類は「言語を持つのは人間だけ」と信じてきた。いや、

決めつけてきたといってもいい。著名な哲学者も言語学者も動物行動学者も「言語を持つのは人間だけで動物たちの鳴き声は感情表現に過ぎない」と捉えて疑わなかった。それに対し、鈴木さんは自然の中で得られた、人類がまだ言語化できていない多くの

情報を偏見なく受け止め、研究者としての知見を生かして自然の中で起きている現実の検証に力を注いできた。

AI(人工知能)が急速に進化し、人々の暮らしの中に浸透した現代。人類はますますAIに情報源を頼り、回答をうのみにする。心地よいスローガンを聞き、満足する。そうした傾向が一層強まっていることに鈴木さんは懸念を持つ。自然と人との距離がさらに広がってしまう。今だからこそ「自然に触れる機会を増やし、体験する機会を意識して持つこと」が一層大切になる。私たちが言葉に飲み込まれてしまわないために。

(野村知秀)

シジュウカラが持つ言語能力を研究し、「動物言語学」と新しい学問分野を切り開いた鈴木俊貴さん。4月21日、軽井沢町



小鳥は言語を持つ 種を超えて語らう

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

鈴木 俊貴さん

対談

小林 光さん



鈴木 俊貴さん 41

東京大学准教授。動物言語学者。日本学術振興会特別研究員SPD、京都大学白眉センター特定助教などを経て現職

なぜ、シジュウカラ

小林 シジュウカラに言語能力があることを発見し、「動物言語学」という新たな学問分野を創設されましたが、どのようにして小鳥たちの会話を聞き取れるようになったのですか。

鈴木 森に通って観察と実験を繰り返していくうちに鳥たちの世界とつながり、会話や思考が分かるようになりました。軽井沢の森に通うようになり今年で20年目。まさか20年も通うことになると思いませんでした。

小林 研究対象をシジュウカラとしたのはなぜですか。

鈴木 シジュウカラは日本中どこにでもいる小鳥ですが、鳴き声のレパートリーが驚くほど豊富です。どうしてこれほどたくさん

声を出すのだろうという素朴な疑問が出発点ですね。長年研究を続けてきましたが、毎年新しい発見があります。鳥たちの世界の豊かさに驚かされます。

小林 なぜ軽井沢だったのですか。

鈴木 軽井沢は国内有数の探鳥地です。年間を通じて100種類以上の野鳥が観察できる貴重な場所です。日本で最初に制定された国設の「野鳥の森」もあります。

小林 いろいろな鳥が集まるのは植生が豊かだからでしょうか。

鈴木 そうですね。針葉樹と落葉樹のバランスが良いと思います。樹種が多いと木の実も多様です。餌となる虫も豊富です。初めて軽井沢の森に来た時、シジュウカラとヒガラやコガラといったシジュウカラの仲間(カラ類)が



小林 光さん 75

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー(環境分野)

軽井沢の森に通って20年

鳥肌が立つ賢さ

小林 シジュウカラはなぜ鳴き方のレパートリーが豊富なのでしょうか。

鈴木 シジュウカラは体が小さく、天敵が多いです。力ではかなわないので頭を発達させたのではないかと思います。言葉の力でタカやヘビなどさまざまな天敵から最適な方法で逃れます。それだけでなく、言葉を使って自分よりも体の大きな動物から餌を奪うこともあります。

小林 どういうことですか。

鈴木 例えばタカが来たとき鳴

き、それを聞いたリスが逃げたときにリスが食べていた餌を横取りします。

小林 リスもシジュウカラの言葉が分かって逃げられるのですか。

鈴木 おそらくリスも学習しているのだと思います。そしてシジュウカラがそれをうまく利用しているのです。そういった世界が自然の中にあることを知り、森に通いたい気持ちが一層強くなりました。鳥たちは本当に賢いです。賢すぎて怖くなることもあります。

小林 私も鳥が言語を持つとは思いませんでした。

鈴木 「言語を持つのは人間だ



軽井沢野鳥の森の中に設置した巣箱の前でシジュウカラの鳴き声に耳を傾ける鈴木俊貴さん(右)と小林光さん＝4月21日

体験なければ響かず

ーヒビヒ

鈴木 あ、今気付きましたか? 「ヒビヒ」と鳴いていて「気を付けろ」と警戒しています。さっきまでさえずっていた小鳥たちの鳴き声が一気になくなりましたね。

小林 はい。ぱたっと静かになりました。

鈴木 そういった世界があるのです。私も今、緊迫感を感じています。あ、警戒感が薄れてきましたね。

小林 これは森に通うのがやめられなくなりますね。世界にはまだまだ分からないことがたくさんあります。

鈴木 最近子どもも大人も分からないことがあったら、インターネットで検索し、AI(人工知



「ジャージャー(ヘビだ!)」と鳴くシジュウカラ(鈴木さん提供)

AI情報だけで満足?自然の中での気付き大切

けである。多くの本や論文が書き連ねています。「動物の鳴き声は喜びや怒りといった感情を伝えるだけだ」と。時代をさかのぼれば古代ギリシャの哲学者アリストテレス(紀元前384～322年)から現代の名立たる学者、博士たちまで「言語を持つのは人間だけ」が定説でした。ところが、鳥たちを研究していると、ちゃんと言語を持っている。『ヒビヒ』はタカ、「ジャージャー」はヘビ。そして単語だけでなく、文法も持っています。

小林 文法も、ですか。

鈴木 シジュウカラの「ピーツピ」は「警戒」、「チチチチ」は「接近」を意味します。だから「ピーツピ・チチチチ」は警戒しながら接近」となります。スピーカーで流したところ、シジュウカラたちは首を左右にキョロキョロさせながら音源に近づきました。ところが、私自身、自然界で一度も聞いたことがないチチチチ・ピーツピという警戒と「接近」の語順をひっくり返して聞かせると、首を左右に振るシジュウカラの数もスピーカーに近づく数も大幅に減りました。つまり語順を認識して意味を理解しているのです。びっくりするくらい人間の言語に近い。人間だけが言葉を持っている動物はしゃべらない。だからろくに動物の言葉を研究してこなかったのです。まさに人間の方が「井の中の蛙」だったのです。

小林 それで動物言語学という学問をつくることにしたのですね。

鈴木 動物たちの言葉を解明するためにどうしたら良いかを考えた時、僕はシジュウカラと一緒にその枠組みをつくることにしました。将来、多くの動物学者がいろいろな動物の鳴き声が言葉になっているのかどうかを調べる学問をやってほしいです。

伐採といったさまざまな問題の存在に気付いています。気付いていながらスローガンだけ聞いて満足してしまふ人が多いように思います。例えばSDGs(持続可能な開発目標)どんなに良いスローガンでも受け取る人にその体験がなければ響きません。

小林 ではどうしたら良いのでしょうか。

鈴木 自然に触れる機会を増やすことです。AIが出した答えだけに頼らず、自分で調べてみてください。自然の中には言葉になっていない情報がたくさんあります。AIが示した情報だけで終わってしまふ人生ってつまらないと思いませんか。AIが進化していく時代だからこそ、体験する機会を意識して持つようにしないと、私たちは言語を操るどころか、言葉に飲み込まれてしまふのではないかと思います。